

## 世界盲人福祉協議会の最近の動向(Ⅱ)

社会福祉法人日本ライトハウス  
理事長 岩橋英行

### 目 次

1. 世界盲人福祉協議会と私 —— 25年を顧みて ——
2. 世界盲人福祉協議会と世界盲人連盟
  - (1) 合同への歩み
  - (2) 調印文
  - (3) バドベルレブルグにひろう
  - (4) 新たな挑戦
3. 第6回世界盲人福祉協議会総会より —— アントワープにて ——
  - (1) 開発途上国の課題
  - (2) 盲人の行動訓練
  - (3) 盲人のスポーツ
  - (4) 盲婦人問題
  - (5) 失明防止
  - (6) 盲人に対する情報サービス（点字、声の図書を除く）
  - (7) 観光と会議場にひろう
  - (8) 今日への直視と未来への課題
4. 主なるスピーチ
  - (1) 世界盲人福祉協議会と世界盲人連盟の対話について  
…………世盲協会長ボリス・ジミン
  - (2) 援助資源の活用…………西ドイツ・クリストフェル・プリンデンミッショն  
ウォルフガングスタイン
  - (3) アジア委員会報告…………アジア委員会委員長フレッシュ・アフジャ
  - (4) 世界の盲人口減少における研究の大きな可能性  
…………ナショナル アイ インスティテュート所長 カール・クッフェル
  - (5) はなし言葉を通しての情報（ラジオ、テレビその他の情報機関を通しての盲と社会のかかわり）…………世盲協副会長 岩橋英行
5. 第6回世界盲人福祉協議会総会 決議文  
(1979年8月1～10日 於ベルギー アントワープ)

### 3. 第6回世界盲人福祉協議会総会より 一アントワープにて一

#### (6) 盲人に対する情報サービス（点字・声の図書を除く）

1978年大阪で開かれた世盲協役員会において、「盲人が情報を得る手段として点字と声の図書があるが、それ以外に、この社会にはもっと多くの情報入手の方法があるはずです。また逆に、盲人のニードや盲人の持つ多くの問題を、一般社会に訴えるためには、どのようなチャンネルが利用されているか。こうした事を今迄調査された事もなく、この面にスポットを当てた経験もないで、このリソースの掘り起こしを誰か行なう人はいませんか。」という声が出ました。

彼等は、大阪の駅頭に点字ブロックを見、自動券売機の点字表示板を見るにつけ、私にその調査を託すことに意見が一致しました。あまりにも多様で漠然としているがために、一体どこからマトをしづればよいのか迷ったわけありますが、結局盲人にとって最も必要な課題は、都市においては交通戦争の中をいかに行動するか、第二には盲人の可能性を社会に周知徹底させて、どのようにして職種と職域の拡大をはかるかが大切であり、開発途上国や農村地帯にあっては、失明防止と盲に対する間違った宗教観や偏見を打破する事と、職業、教育への関心を高める課題であろうと考えました。よって、手段は異なるにせよ、盲人のために作られたものと、盲人を理解させるために作られた2つの種類に分ける必要があると思いました。こうした事を基盤にして、南アメリカ地区、北アメリカ地区、オセアニア地区、アジア地区、中近東地区、アフリカ地区、ヨーロッパ地区、北欧地区、共産圏地区に分け、その中から任意抽出にて36ヶ国を選び、2月から6月末日の期間中において、全世界的に調査を実施致しました。恐らくこの種の調査は、これが最初であろうと思われます（調査報告書は別記）。

さて、総会席上こうした報告を行なつた時、あきらかに2つの方向に分かれているのに気づきました。欧州、北アメリカ、オセアニア、ソ連等は非常な関心を示し、交通上、教育上、職業上の問題を、社会のどのリソースを通し活用しているかを盛んに討議しましたが、開発途上国においては、殆ど高嶺の花といった感じで、何の反応をも示しませんでした。というのは、新聞は出ていても、國民の殆どが無学文盲であるという国や、ラジオやテレビは一部の金持ちだけのものであるとか、ましてや点字ブロック・音響式信号機等は、何世紀か先の話であるといった状態がありました。しかし先進国の中でも、特に注目を引くのはアメリカの報告にあるごとく、盲人専用の放送局が設置されていたり、各種各様の盲人のための設備が公共の場、建物の中に付設されている事は興味深いものであります。また、ベルギーにおいて

は、世界で最初に盲人番組を取り上げたそうであります(1949年)、さすがに盲に対する一般社会の理解は素晴らしいものでした。タクシーに乗っても殆どの運転手が盲人の手引きの仕方を知っていたし、車に乗る場合、片手をドアに片手を車の屋根にあてて、ドアの開き具合、屋根の高さを教えるあたりなど、盲に対する理解の深さを示すパロメーターがありました。

前号において、盲人が社会に入るためのパスポートとしてスポーツとリクレーションを挙げましたが、一般社会と盲人の交流になくてはならないものこそ、各國が各様に苦心の末あみ出した盲人のために作られたもの、盲人を理解するために作られたその手段・方法をよく知る事が必要ではないかと思われます。しかもその中で最も重要な事はマスコミの利用であり、マスコミからの深い理解による盲への接近であろうと思われます。いかに法律が、制度が完備されたとはいえ、一般社会の市民参加がない限り、盲の社会進出は不可能であるというのが参加者の意見のようありました。しかもそうしたマスコミ・一般社会への呼びかけこそ、今後の盲人団体の重要な任務であると言われたのも、意義深い事であります。

#### (7) 観光と会議場にひろう

会議が開かれたアントワープの街、そして日曜日と休みを利用して主都のブリュッセル、古都のブルージュを訪れました。

##### a. アントワープ

行き交う自動車の群れに手綱を打てば、必らずと言っていい程2台か3台のキャンピングカーがかかるでしょう。10台のうち2台か3台は、屋根にボートを積んだキャンピングカーです。フランス、オランダ、ドイツ、イタリー等々、欧州各国のナンバープレートをつけた自動車がホテルの前を行き交います。あまりの多さに、室内と2人で「一体どこへ行くのだろう。」と話し合いました。ちょうどこのホテルは公園の中に建てられていますが、ホテルの前は大きな空地になっています。ただ草の生えた何の変哲もないのですが、土・日曜日ともなればキャンピングカーがどつとつめかけます。キャンピングカーの長屋といった感じです。煙突から煙がたなびき、料理をする様々なにおいが流れています。そう暑くもないのに、昼どきともなれば女の子はビキニスタイル、男の子は海水パンツひとつで、ビニールの敷物の上で短い夏を楽しんでいます。ちょうど日本ライトハウスの前に、大阪市営のグランドがありますが、ここへキャンピングカーを持ち込み、炊事をし、日光浴をしているのと変わりありません。日本であればさしあたり、リュックをかつぎ、谷

川を求め、日本アルプスへと向かうのでしょうか、山のないベルギーでは、こうした平坦地、しかも自動車のひっきりなしに通る市内の国道の横で、キャンプにうち興じている姿は、私達には誠に奇異に感じられました。

今一つの話。家内に手を引かれ、市内に中華料理を食べに出ました。レース屋があるので、ショーウィンドーをながめています。私は無意識に杖で溝蓋を叩いていましたら、杖が手から離れました。溝に落ちたようなので、家内に取って欲しいと言いましたら、取れないという答えが返ってきました。日本の溝は、せいぜい30cm程の深さですが、こここの溝は地下3階程の深さがあり、はるか下の方に白杖が小さく見えるという事です。耳をすますと奥底の方から、かすかに水の流れる音が聞こえてまいります。いやはや大変な溝であり、うかつに溝蓋の上で遊んではいられない事に気がつきました。

#### b . ブリッセル

アントワープから急行電車で約1時間のところにブリュッセルがあります。観光はバスでも出来るようですが、家内と2人で歩く事にしました。最初にかの有名な小便小僧を見に行きました。せいぜい40~50cm位の大きさで、もっと大きいのかと思っていましたが案外がありました。黒い人、白い人、黄色い人と、正に人種の展覧会といった感があり、盛んにシャッターを押していました。次にグランプラスの広場、市庁舎、ギルドハウス、サンミシェル教会、独立記念塔、国会、裁判所、等々を見て廻り写真を撮りましたが、このブリュッセルというところは、主都であるながら、あの東京や大阪で感じるような威圧感、恐怖感というものがなく、全く人間優先で、自動車は人が歩き出すと殆どと言っていいほど止まってくれます。信号が赤でも人は平気で横断しています。街の角では街頭芸人がバイオリンをひいたり、フルートを演奏していて、ちょうど奈良を連想させます。

王宮だったので、写真だけでも撮ろうと思い、王宮前まで行くとゾロゾロ見物人が中へ入っています。銃剣を持った近衛兵が歩哨に立っているので、おっかなびっくり中へ入りましたが、王宮は市民に開放されているというので安心しました。ルイ14世風のどっしりとした石造りの建物で、オランダの国王からレオポルド2世まで3代にわたるベルギー国王が住まわれましたが、国王はブリュッセル北郊外のラーケン宮におられます。現在この王宮は国賓の謁見用に使用されており、国王がご滞在中は、赤・黄・黒のベルギー三色旗が掲げられます。正面の総大理石階段を左に折れると、各部屋が並んでいます。女官長の間、王女の間、王妃の間、等々と次々に歩いて行きますと、ふと気がついたのは廊下のないことです。家内と「昔の

人は、廊下なしで部屋をつたって目的の部屋へ行ったのだろうか。何と不便なことだろう。』と話し合いました。謁見の間は300畳敷の広さでしょうか、いやもっと広かったのかもしれません、天井からは豪華なシャンデリアがつるされ、壁には素晴らしい絵画が掛けられ、壁画も描かれています。奥の正面には王座があり、ベルサイユ宮殿と同じような造りです。窓の外で近衛兵の交替が行われているのか、ラッパと吹奏楽の音が聞こえ、衛兵の軍靴の音が石だたみの上を伝わって来ます。観光客がどっとそちらの窓の方へ走って行きました。日本でこうした謁見の間や王宮を、国内外の観光客に開放するなどとは思いもよらぬ事であり、王室と国民の間に壁のないことを知りました。日本のように、赤軍派が爆薬を仕掛けるとかの物騒なウワサなどがあれば、開放しようにも術がないのでしょうか…。ここベルギーには、そうした過激派分子がいないのか、その治安の良さにちょっとうらやましさを感じました。

王宮をあとにして博物館に行きました。カメラ、ハンドバッグ、ステッキ、傘、等は全て預けるという事なので、私も白ステッキを預けようとしましたら、門衛がやって来て、これは貴方の体の一部ですという事で、所持するのを許可してくれました。アントワープの動物園に行った時も同じ体験をしましたが、私と家内が2人分の入場料を払い、改札を入って歩き出しますと、後から息せき切って売り子のおばさんが大声をあげながら走って来ます。私と家内が何か不始末でもしたのであろうかと立ち止まりますと、「誠に申し訳ない。」というのです。「切符売り場の窓口で白ステッキがわからず、通常の料金をもらいましたが、盲人の方とお連れの方は合わせて1人分でけっこうです。」と、金を返してくれました。同じように、アントワープのルーベンスハウス（画家ルーベンスの生家）を見に行った際にも、彼の使っていた洋服ダンスや事務机、食卓、宝石入れ等は全て鉄の鎖で囲まれて入れないようになっていましたが、番人がやって来て、「あなたは盲人だから、触らないとわからないでしょう。」と言って、鎖をはずし中に入れ、私の手を取って「これが愛用の洋服ダンス、これが時計、これがフォーク。」と触らせながら説明してくれたのも、さすが世界で最初の盲人番組を持った国だと心温まるものを感じました。

#### c. ブルージュ

アントワープから汽車で約2時間のところにブルージュがあります。オランダ語で“橋”という意味の街だそうです。16世紀にズヴィン湾が土砂で埋まり、それ以後無数の運河によって交易場として発達しました。道路という道路は石だたみで敷きつめられ、9世紀から15・6世紀までの建物が完全に保存されています。よって

一名ドライフラワーとも呼ばれています。小さな街ですが、運河には無数のアヒルが大声をあげて遊んでいます。石だたみの上を、観光用馬車がひづめの音も高らかに行き交います。ノートルダム寺院の壁を触ってみましたが、風化作用がはなはだしく、彫刻の部分など強く触るとボロボロと欠けそうです。

インドのCapt. デサイ、ナナワティ夫人、オーストラリアのホールズワース氏と私達2人がこの街の訪問者となったわけです。まさかと思っていましたが、ご多聞にもれずここにも日本人専用の売店があり、日本語で“観光案内いたします”と書かれた看板が出ていました。ドライフラワー、その名のごとく、どの喫茶店、食堂も昔のままの姿で残されており、赤いマントをはおった鎧をつけた騎士が馬にまたがって歩いていても決して不思議ではないと、Capt. デサイが説明してくれました。各家々の屋根には、人間の顔やニワトリ、ライオン、といった具合で彫刻がほどこされ、ドアも思いきり力を入れなければ開かないような頑丈なものです。

この街の特産は、手で編んだレースもので、テーブルセンター、花瓶敷、服地、カーテン等々、上は數百万円という高価なものからあります。レース編みは、糸の先に重石をつけ、ピンのようなものをくぐらせたり交叉させてからませたりしながら、目にも止まらぬ早さで編み上げて行きます。また今一つの名物はトリの丸焼きで、ガスのとろ火の上で鉄の棒で突きさしたトリをぐるぐる回転させながら焼いています。その上に時々タレをかけるようですが、そのタレがこげるにおいが、昼食時とともに街中に漂い、腹をすかした我々には食欲を起こさせるに充分なものがありました。人情はまことに豊かで、愛想よく純朴そのものであり、皆、異口同音に発した言葉は「こんなところに住めたらなあ。」ということでした。今迄、欧州という国々の有名な街はほとんど歩きましたが、この街ほど日本人の肌にピッタリ合ったところはありませんでした。

#### d. 会議場にひろう（開発途上国よりの援助依頼）

この総会ほど、入れかわり立ちかわり開発途上国からの助成依頼を受けたのも珍らしい事であります。朝・昼・夜の食事には、必らずどこかの国が「一緒に食事をしよう。」と言ってきます。家内と2人で、せめて朝食ぐらい仕事の話抜きで食べたいものだと、ぐち話をしたくらいです。アジア、ラテンアメリカ、東ヨーロッパ等々から各種各様の助成依頼がありました。時には夜遅く私達の部屋にまでやって来ました。一番大きいのは、『アジアの失明防止とリハビリテーションのために、1億円の基金を作りたいので、その70~80%は是非とも日本で集めて欲しい、あと20~30%は香港とシンガポールで集めたい。』というものでした(インド)。次いで、『失

明防止のために、スリットランプ、眼科用医療器具、薬品、テープ1000本、テープレコーダー10台、等々の寄贈申し込みがありました（パングラデシュ）。また『点字図書館は出来たけれども、録音の復写機がないので、日本でこれを作っている会社名と社長を紹介してほしい。』（インド）。『日本の盲人用具の開発は素晴らしいものがある。その技術を輸出してくれないだろうか。国立の盲人用具の製作所をつくり、中近東、アフリカ、アジアに低価にて販売もしくは給付したい。』（サウジアラビア）。『“盲人の手引きの仕方”をテレビでスポット番組として放映しているそうであるから、そのフィルムを送って欲しい。』（ガテマラ）。その他、眼科医・盲学校教員・リハビリテーション指導員・歩行訓練士の養成依頼と、数かぎりない申し出にどのように対処して行けばよいかに頭を痛めたものであります。聞けば聞くほどもっともな事であり、必要なことありますが、どこから手をつけて良いのか見当もつきません。

スウェーデンは、国費で開発途上国に対する援助を行なっていますし、西ドイツでは、クリストフェル・プリンデンミッションがアフリカ、アジアの失明防止、盲教育の教材、教具、教員養成に莫大な金を使っています。英国は、RCSRが旧植民地に対し50～100億円近い金を支出して、毎年アフリカ、アジアに対し失明防止のためのアイキャンプを30～40隊近く派遣しています。アメリカにおいては、ヘレン・ケラー・インターナショナルがラテンアメリカ、アジア、アフリカに歩行訓練士、社会福祉施設指導員、盲学校教員、等々の養成、農村における農業訓練センターの設置、失明防止等にRCSB以上の援助を行なっています。ソ連は勿論のこと、衛星国に対し盲教育、福祉の援助や指導をし、フランスにあっても旧植民地に対する援助が続けられています。更にサウジアラビアは、中近東全域に対し毎年数百億円とも言われる龐大な金を投入し、盲学校、授産場、眼科病院、盲人相談所等を建設しております。

こうした事どもを見るとき、こと盲に関する限り、日本においてはアジア眼科医療協力会が、細々ながらの失明防止の援助しか行なっておりませんが、オーストラリア、ニュージーランド、カナダは、ここ数年来より開発途上国に対する援助を開始しました。

私は、こうした総会に今後是非とも日本政府の高官が出席し、盲という限られた部門ではあっても、開発途上国の方々の切実なる声を是非とも聞いてもらいたいと痛切に感じました。

#### (8) 今日への直視と未来への課題

人間は真理を探求し、思索にふけるものであります。真理とは、時には平和と呼び、愛、哀しみ、真実、等々言葉をかえて表現されますが、今、身近かにあったと思えば遠い彼方へ飛び去るときもあります。

昭和29年の世盲協第1回総会以来、この第6回総会まで、世界の盲人関係者達は盲への真理を探求し思索をこらして、東西の人も南北の人も、盲人の幸福のために世界の各地から集まってまいりました。日本にスポットを当ててみましても、この25年の歩みは遙二無二という言葉が最も適していたように思われます。盲関係だけでなく、日本のすべてが“猛烈社員”という名のごとく、敗戦の中から立ち上がり、追いつけ追い越せの言葉通り、日本の国が、1つの企業となってゴールを目指し、ひたすらに走り続けました。先日もテレビで、日本の経済と科学というテーマの中で、ちょうどマラソンにたとえると、後方からやっと先頭集団に入り、折返し地点を曲がってトップのランナーの後から2位、3位という順序で走っているのが現状で、ゴールまでの3分の1は自分のペースで、トップを走るか2位3位という形で先頭にペースを合わせるかの判断をしなければならない。これが日本国民の21世紀に対する課題であると言っていましたが、それは科学、経済だけの問題ではなく、やはり盲という限られた社会においても同じことが言えるのではないでしょうか。私も学生時代よく駅伝競争に出ましたが、先頭に誰かがいる時は、それを目標に自分のペースを作りました。しかし山の中で、前後に1人のランナーもいないで、自らペースを作りながら走るという事は非常に苦しいものがありました。

今まで書いてまいりましたように、もはや目標とする先頭ランナーは1人か2人かもしれません。否、時と場合によってはトップを走っているかもしれません。その時に全てのバランスをくずさず、自分のペースを作りながらより有効な方法で速さを増すという事は、大変なことだろうと思います。開発途上国からの期待と、それを裏切らないようにするための援助と指導には、今まで我々盲人の先輩達が築き上げた以上の世界観と思想と周到な準備が必要でしょうし、舞台が広いだけに、その責任は過去のそれとは比較にならない重きを持ってまいります。しかし、もし仮にそうした対外的な事は、日本としては考える必要がなく、自分の国だけの事しかやらないのだと言えば、それまでであります。しかし、そうした選択をするとき、世界の孤児という刻印もおされる覚悟が必要であります。もしこの世界に真理があり真実があるとすれば、この他者か自己かという選択の中で、他者なくして自己はあり得ず、自己なくして他者があり得ないという相関性の中に足がかりを求め、

自他相互の競存こそ真理である事に目を向けていただきたいものであります。

盲人ほど大きなアクシデントやパニック、戦争に敏感に反応し、最も悲惨な状態の中に取りのこされるものはありません。行動力の不足から変化に敏感な対応が出来ないのが、また盲人であります。人間の中には、天使と悪魔の共同作業場が存在すると言われますが、平和にして衣食住が足り、ゆとりある生活にあってはこの上ない天使の表情と神に近い愛の手を差しのべようと致します。しかし、一変して飢餓、混乱、戦禍といったような状態に直面すると、理性を失い他をかえりみず、本能的に自らの生命保存のためにのみ判断し行動しがちであります。前者の場合においては、盲人達は福祉、奉仕、協力等々といった形で接してもらえますが、後者の立場におかれた場合、盲人ほど忘れ去られるものはありません。かつて戦争中、日本の勇ましき青年将校が、「めくらは穀つぶしである。キサマラは死んでしまえ！」とわめいていたことを思い出しますが、これは決して軍国主義時代にあっての言葉だけではなく、パニック状態の中におかれた醜い人間の言葉としても置きかえられがちです。

今回の総会において、こうした事をあまりにも多く聞きすぎました。ベトナム戦争、カンボジア戦争、パキスタン戦争、中近東戦争、アフリカ各地におこっている独立戦争、そしてガテマラの地震、バングラデシュのサイクロンなどに巻き込まれた盲人達が、どのような悲惨な形で取り残され、虐殺され、餓死して行ったかを考えるものであります。バングラデシュから戦火に追われて、インド国境に何万、何十万という避難民の群れが続きます。盲人達は常にその最後尾であり、後から機関銃や戦車が追いかけて来ます。歩くことを止めればそこには死が待つのみであります。人の声と足音をたよりにやっと逃げのびた盲人達が、インドの家庭に保護され、休息の場を与えられました。盲児達も盲学校の1室にベッドを用意されたのですが、この子達は真夜中にネコの足音にも目を覚まし、ドアの開け閉めにも飛び起き、食事にも毒が入っていないか怖れ、何かあると恐怖の絶叫をあげたと聞きました。しかし、こうして助けられた盲人達は、まだそこに食物と眠る場所がありました、国境を越え得なかった人々がどうなったかは想像にかたくありません。日本の戦争中を思い、こうした事々を聞くにつけ、我々日本の盲人達は、今日をもたらした諸先輩への感謝と、良き時代にあることへの喜びを味わう事が、より豊かな人間性への成長だと思います。

人間は理由と理屈をつける天才であります。このマジックにかかると、白が黒になり、黒が白になりますが、いかに立派な理由や理屈をつけても、それが戦争とい

う結果を招いたり、革命であったり、政変であったり、大きな経済変動であれば、我々盲人達にとっては悪魔の使者でしかありません。また人為的なものではなく、地震や台風のように天災的なものであっても同様であります。平和時にあっては、私達は権利という形で福祉というラッパを高らかに吹きならす事は出来ても、これが急変し、パニックという状態に置かれた時、福祉というダイヤモンドは石ころ以下の存在となり、他者からの援助や協力は全く皆無に帰し、その危険から自力によって逃げのびねばなりません。果たしてこの日本が、永久に今のままの状態を持つて21世紀に入り得るのか否か、大きな課題が山積しています。資源のない日本において、最も必要とされる石油が不足し、代替エネルギーがまだ作られていないという事実、明治維新当時3500万の人口が、終戦後には7500万、20年後には1億3000万人程にもなろうとしています。この龐大な人口、狭い国土、食料の自給自足といった3つのバランスを、今後うまく取り得るか否か、またこうした事どもから来る政変の不安定、失業者の増加、経済の急変、等々を考えたとき、常に最悪時における自力脱出を我々盲人は考えておかなければならないでしょう。誰が明日を保証するのか、それに答え得るのは自らの力を知っている我々自身である事に気付いたいものであります。

少なくとも世界先進国の盲人団体はその方法、手段において異なるにせよ、法律を作り盲に対する社会の理解を深め、盲人の能力を訴える事に努力をしてまいりました。その業績は各々の国において盲人史の中に書き込まれるであります。しかし盲人だけが盲人だけの世界を作っているのではなく、社会の中の一員であると思うとき、晴眼者と盲の間にある溝や谷をどのような事があっても埋めて行かねばなりません。たとえ長い時間をかけても……。特に日本の場合、一般社会の盲に対する理解と関心は、開発途上国は別として先進国のそれと比較するときいまだしの感がいたします。確かに日本人は同情心にあつく、諸外国と比較して涙もろい点は多々あっても欠点として永続性がなく、科学性と合理性に欠けているように思われます。特に愛情とか福祉、奉仕という命題に対しては、同情、憐憫、涙をもって相対しようと致します。しかし、そこへ合理性、科学性、厳しさ等を導入することは不似合いな要素を受け止めがちです。深い理解、強力な力、永続性を望むならば、やはりそこに秩序正しい科学性、合理性が加味されなければならないでしょう。これらを思うとき、未来への課題として盲人の事を最も適確に表現し、そのニード、希望を端的に伝え得る盲人団体こそが、一般社会に対し今迄より一層積極性をもつて盲人社会への理解ある市民参加を呼びかけられるのではないでしょうか。

「何故に日本の国は龐大な黒字を抱え、巨大な産業力を持ちながら、開発途上国のみ々に援助や協力の手を差しのべてくれないのか。」という質問をおそらく私だけでなく海外に出かけられた方々は、言いまわしこそ違え、受けられた事だと思います。私も日本人でありながら同じ疑問を持つものであります。盲関係以外でも色々な課題が出てまいります。例えば、米はあり余る程生産され、処置に困っているという事ですが、かつて韓国が米の海外援助を行なった際、何年か後に返還するという形で援助がなされたようです。近く韓国から返済期限を履行して龐大な米が日本にかえされるという事です。韓国側から見ればあり余った米の上になお米を貯めてどうするのかという素朴な疑問を持つでしょう。ニュースなどでも、タイ国に流れ込む難民は一食の米にも不足し餓死していると聞きますが、何がゆえにこうしたところに救済米が送られないのでしょうか。バングラデシュでサイクロンが発生したとき、医薬品と食料不足に最も困ったと聞きました。英國、西ドイツ、アメリカ、等からはさっそく空輸で食料品や医薬品が大量に輸送されました。けれども日本からは忘れた頃に救援物資が届いたといいます。しかも米の場合、不当に野積みとなり、米から芽が出ていたと聞き及びます。薬品や食料は一刻を争うものであり、必要時に送られてこそ本当の救援の意味と価値があるのです。また石油が不足し、生産国において石油の生産を制限する事態になってからあわてて石油買い付けに美辞麗句や贈物をもって走り、工業の共同経営を持ち出しても、欧州諸国と比較して既に手遅れであるという事を中近東の代表から聞きました。こうした事は盲以外の一例であります、最初に書いた如く、「何故、日本は金持ちでありながら我々に援助をしてくれないのであるのか。」という間に對し、何故ならばという回答は以上の3つのチグハグな実例からも推理出来るごとく、縦割行政の悲しさと島国根性の狭量さがその因であると言えるでしょう。

国外にのみ目を向けてまいりましたが、国内の盲人福祉にもある時にはこれが当ではまる気が致します。一見、世界最高の法律と設備を誇った盲教育、福祉も細かく分析すると、重複障害盲の課題、益々増加するであろう盲老人対策、瞎眼者の三療職域への進出に対する防止、身体障害者雇用促進法における150億円近い納付金の改善、盲人の新職種、職域拡大への設備投資とP R、盲人社会への市民参加、緻密に組織されたホームティーチャーシステムの実現、等々の不完全性はやはり韓国やバングラデシュ、中近東に見られるような要因から起こったものではないでしょうか。自らの力で先頭集団をリードし、ゴールに向かって走らねばならない日本の課題として、私はこの総会が日本に教えてくれるもの多々あると深く思索するもので

あります。

参加国は65ヶ国、出席者はオブザーバーを含めて284名であり、国連各機関、国際団体等の参加は14団体ありました。それ以外に本部および地元の事務局員等が参加致しました。最終日に向こう5年間の世盲協を統括し、指導する会長が選出されました。5年前のサンパウロにおいて開かれた総会で、現会長のボリス・ジミン氏（ソ連）とドリナ・ノウィル夫人（ブラジル）が、投票の結果、わずか数票の差でジミン会長に決定した事を思い起こしました。こうしたいきさつがあったからかどうか存じませんが、今回は殆ど大多数の人がノウィル夫人を支持しました。彼女が選ばれた時、列席者は全員起立して万来の拍手を送りました。1954年第1回パリ総会以来、全て会長は男性であり、しかも北半球から選出されていましたが、今回は南半球であり、しかも初めて女性を選出したわけです。皆の感激もまたひとしおのものがありました。それと共に、全く英語が話せなかったにもかかわらず、通訳を通して誠実さと友情をもってこの5年間務められたジミン会長に対しても盛大な拍手と賛美が送られました。ボルター氏の挨拶にもあります、「貴方こそ、世盲協の会長にふさわしき人」という言葉の通り、常に冷静さと忍耐をもって事にあたられたジミン会長の功績は永く歴史にのこることであります。

最後に、新会長ドリナ・ノウィル夫人は次のような事を申しました。「私達成人盲は盲児に対しては忠実であり、青年盲からは信頼され、我々成人はお互に愛し合える盲人になりたいと思います。」この名言は、なみ居る人の中に強く刻み込まれた事であります。前回も今回も私に会長になるようお勧めがありましたが、辞退してまいりました。5年後にはどうしてもなってもらわねば困るという声が多くあり、そうした責務にたえ得る人間であるかを自問自答し、また日本として出て良いのか否か、この拙文をお読みになる方々によってお考えいただければ幸いであります。

「愛盲」これは亡父岩橋武夫の残した言葉であります。晴眼者が盲人を愛するというだけではなく、むしろ盲人達が相互に愛し合う気持がなければという事をこの二文字は強く語っております。本年亡父岩橋武夫が昇天してから25周年にあたるを覚え、その靈前に、このきさやかな一片の書をたむけるものであります。

(昭和54年10月18日記)

#### 4. 主なるスピーチ

##### (1) 世界盲人福祉協議会と世界盲人連盟（IFB）の対話について

世盲協会長 ポリス・ジミン

第6回総会のテーマは、今日我々が取り上げようとしているこの問題の解決のために、最もふさわしいものであると思われます。

世盲協とIFBとの協力というものは、世界中の盲人福祉の促進のために最も基本的にして、最も重要な欠くべからざるものであります。

5年前にサンパウロで総会が開かれた際、多勢の人々が、世盲協とIFBとの関係をより緊密なものにするために努力を惜しまないという意思表示をしました。この5年間世盲協の会長として、他の役員方と共にこの目標達成のために最善を尽くしてきました。このことについては後ほど詳しく触れたいと思います。

世盲協とIFBとの間の相互関係というものの今後の発展について私の意見を述べる前に、まず、皆様方に現在の国際的な盲人の社会運動の状況というものに注目していただきたいと思います。こうした実情というものを客観的に評価することこそ今後の協力の可能性を探し求める事が出来る基盤となるものであると信じます。

ご存知のとおり、現在盲の分野においては4つの主な国際的な団体が存在しております。それらはIAPB(世界失明防止協会)、ICEVH(世界盲青年教育者協議会)、IFB、そして世盲協であります。このうちの2つ、つまりIAPBとICEVHは各々特殊な目標を持っております。即ち、IAPBは失明防止であり、ICEVHは盲人の教育をその唯一の目標としているわけであります。これらの2つの団体は専門的な立場からそれぞれの目的を達成しようと努力しております。しかし後の2つ、即ち世盲協とIFBの場合は、その目標とするところは世界の盲人福祉という1つの共通したものであります。しかし、この共通した目的に向かってこれら2つの団体は異なったアプローチをしているという事が言えると思います。世盲協の場合には、いわゆる専門的な立場、つまり盲人援護団体やこの分野での専門家達との実際的な経験、あるいは盲人団体や社会事業に経験を持つ盲人の指導者達との経験、知識というものを1つにしてこの目的達成のために努力しようとしています。またIFBのアプローチの仕方というものは、主としてそのメンバーである盲人団体の社会的に広い経験を基本的に活用する事をその事業の基盤にしております。

世盲協とIAPBおよびICEVHとの協力というものは現在のところ何の問題もなく行われております。これはそれぞれの役割というものがはっきりと決められ、定義

されているからであります。これらの団体が設立されたとき以来、常に緊密な連絡と絶えざる協力という事をモットーとして我々は現在まで動いて来ました。またこうした協力体制というものをいかにより強力なものにするかという事についても話し合いを行ないました。しかし、これは本日私のペーパーの主題と直接関係のある問題ではありません。同時に私は、こうした2つの団体が同じ目標を持って並行して動いて行くという事は国際的な活動においてはしばしば複雑な問題を起こし、何らかの適切な協力の形というものを求めなければならないような状態になるという事も指摘したいと思います。

私共は、それぞれがこうした盲人の国際的な社会運動というものについて、それが成功するよう責任を持っているという事を自覚する事から、まず始めなければならないと思います。そしてそれを通して世界中何千万という盲人が社会に統合し、充分なりハビリテーションを受ける事が出来るような問題解決の方向へ努力しなければならないと思っております。

こうした意味からも、2つの国際的な団体が並行して同じ盲という分野において活動を続けるという事が、果たして実際的な事かどうか、我々自身に問いかけるという事もまた妥当なことではないかと思うのであります。それぞれの努力をより近づけ、1つにまとめるべきではないでしょうか。また両方の団体に対して、いかなる問題や打撃も与えることなしにそれを行なうにはどうすればよいのでしょうか。

私はこの問題に対する解答を探し求め、また現在の状況というものを正しく評価するという事が本日の討論の主題となるものであると考えます。

盲人福祉の歴史というものを振りかえるとき、我々は先ずその最初は盲人援護団体の手によって、しかも盲人自身の手によって設立された援護団体によって、各国の視力障害者に対する福祉事業というものが始められたという事を数多く認めるわけであります。

まず、110年前に設立された英国のRoyal National Institute for the Blind(英国王立盲人援護協会；RNIB)は、Dr. Thomas Armitageの委員長のもと、4名の盲人の人々による協議会というものがその母体となったのであります。長年の間、このRNIBは他の国々に対して1つの立派なモデルとしてその役割を果たして来ました。そしてこれを目標として多くの国々に同様な施設が出来たわけです。今もなおRNIBでは、その理事会その他責任ある地位は盲人によって占められております。

日本ライトハウスはアジアにおける盲人援護施設の最大なもの1つであると言えると思います。これも1952年に《正しくは1935年創立》、当時の日本における盲人

の社会活動の指導者であり、自分自身も盲人であった岩橋武夫氏によって設立されたものであります。彼は日本における盲人運動の発展のためにこの上なく大きな貢献を行ない、現在の日本盲人会連合の設立という事もなされたわけであります。

Canadian National Institute for the Blind (カナダ盲人援護協会；CNIB) の設立者は、我々もよく存じ上げている Colonel Eddy Baker 氏であります。彼の指導のもとに、CNIB はカナダの盲人の教育、職業、リハビリテーション等の促進に大きな貢献を成して来ました。また13年間世盲協の会長として、彼は国際的な盲人の活動というものの拡大に本当に数多くの努力をなさいました。またフランスの盲人のリハビリテーションに対して大きな役割を果たしてこられた Association de Valentin Haüy (ヴァレンタイン・アウイ協会) も、こうした立派な1つの例であると思われます。

このようなリストはこの他にも数多くあり、いかに盲人援護団体が今日まで盲人の教育、社会統合のために大きな重要な役割を果たして来たかという事が言えましょう。

このような団体の事業は、常に視力障害を持っていたその設立者達、指導者達と一般の晴眼者の専門的な経験や知識というものが1つになって、その成功がもたらされたわけであります。盲人援護団体の活動というものは、その後の盲人自身の国際的な活動の発展の基となり、また訓練を受けた盲人の指導者達が生まれる力ともなったわけであります。このようにして歴史の流れは、やがて盲人団体が各地で急速に発展するに至りました。この傾向は、盲人援護団体の力により経済、科学、文化、あるいは各種のマスメディア、等を通して一層支持され、強化されたわけです。

現在、社会主義国、スカンジナビア諸国、その他西ドイツ、フランス、イタリア、インド、日本等の国々における盲人団体というものは、非常に大きな力を持つに至っております。こうした団体は、各々の国の政府及び専門的な晴眼者の知識、経験等と、盲人事業とを結びつける仲介の役目を果たしています。

社会主義国、スカンジナビア諸国、上記にあげたような国々の盲人団体というものは、今後の盲人社会活動の良き1つの範例と言えるのではないかと思います。

今まで述べたように、盲人福祉というものは盲人と晴眼者の専門家達との緊密な協力の結果、この近代社会において成功するわけであります。我々の経験は決して盲人援護団体と盲人団体との関係において、問題となるような基盤というものは存在し得ないという事を示しております。しかし、一面、今もなおある国々においては、盲人援護団体が盲人団体の存在を無視し、また逆に盲人団体が盲人援護団体

の存在を否定しているような状態がある事も残念ながら認めざるを得ません。こうした状態は決して正常なるものではなく、結果として盲人福祉及び社会統合というものを妨げているほかならないと確信する次第です。

今まで私が述べたような考え方というものは、世盲協およびIFBの役員会によってこの総会に提出されるために準備された決議、その草案の中にも充分に述べられております。

近代社会における盲人団体の目標は、次のような決議の草案の中に明確に示されているのではないかと思います。『本総会は、世界のある地域においては、まだ盲人自身の団体が設立されるような状況に至っていない場合もあり、その場合盲人援護団体による盲人のための福祉事業というものが、今後とも継続して行なわれねばならず、またそれが支持されなければならない事も認めるものである。総会としては、世界のあらゆる地域において、責任ある盲人団体を設立する事が出来るよう努力が払われねばならず、援護団体としても団体の発展を助けるために援助を行ない、それぞれの事業の計画、その他にあたっては能力ある盲人の参加を認め、その運営においてもその可能性ある盲人達を迎えるよう努力をしなければならない事を、強く確信するものである。』

我々役員会としては、この定義ははっきりと今後の世盲協の積極的な活動の方向というものを示しているものであると思い、またそれは国際的な盲人の社会運動というものの発展をも促進するものであると信じています。私としては、今現在の世盲協の状況というものを簡単に振り返ってみたいと思うのですが、ある人々は世盲協は盲人援護団体であると確信し、またIFBは盲人団体であると考えているように思われます。その結果、この2種類の団体というものの間に何らかの摩擦を生じるような考え方というものが生まれたのかもしれません。しかし現実のところ世盲協に加盟してくる盲人団体の数は年々増加しており、その上、世盲協の実行委員会および役員会のメンバーを見る場合にも、事務局長を除けばほとんどが盲人であり、地域委員会、各種の常任委員会の委員長を考えてみてもその多くの人々が盲人であり、かつ各々の国の盲人団体の指導者であるという事も事実であります。

現在73ヶ国の盲人団体および盲人援護団体が世盲協に加盟しているわけで、その各国代表を見るとき60%は盲人団体の代表で占められております。しかも世盲協に国として加盟しているその団体というものは、大多数が盲人援護団体であるわけです。世盲協の中では、全ての各国代表は必ずしも盲人団体の代表をも含めるように常に勧告を行なって来ております。

このように今日の世盲協の方針というものは、積極的に各国の盲人団体の意向をも反映するものであり、また盲人指導者達の意見をも取り入れる機会を充分に与えているわけあります。こうした傾向が今後共一層強くなるという事は、極めて明白な事実であります。こうした見地から、世盲協が盲人援護団体であるという考え方すらも、厳密に言えばもはや誤っているかもしれませんのであります。世盲協のメンバーである盲人援護団体は、この世盲協の目標というものが盲人福祉に関する充分な理解と専門的な知識による貢献であると考えております。こうした考えのもとに、世盲協は世界中の盲人の福祉のために相互的な活動を行なって来ました。

世盲協と I F B の関連について言えば、私としては過去何年かの間、特にサンパウロの総会以来、世盲協としては I F B と協力したいという真剣な意思表示というものを常に行なって来たと言えると思います。我々は合同で役員会を開き、相互の団体の情報を交換するといった事ももう日常の仕事の 1 つとなってまいりました。一般的な問題を討議し、あるいはそれに関する意見や情報を交換するためにいくつかの会合も召集されました。更に、先年は盲婦人の世界会議を合同で誠に成功裡に開催することも出来ました。

1979 年は国連の国際児童年であります。我々両団体は、それぞれの国の政府に対し、盲人の社会的な立場の改良というものに関してアピールを行なうにあたり、共同でサインを行ないました。この共同による作業というものは、その効果は非常に大きく、各国において失明防止あるいは盲人の社会統合の面において、既にいくつかの反響があらわれて来ております。また盲婦人の国際会議を開くための合同委員会も設置されており、非常に望ましい進歩が行なわれております。ヨーロッパにおいても、世盲協と I F B の各ヨーロッパ委員会は、積極的な協力体制が保たれるに至りました。しかし他方、まだ我々の協力体制というものが充分に行なわれていない面もある事は、非常に残念な事であります。その一例としては、世盲協のアジア委員会が地域的なレベルにおける協力を申し入れたのに対し、 I F B のアジア地域委員会はそれを拒否いたしました。

我々の合同による努力というものは、まだ完全な状態からはほど遠い事は充分承知しております。しかし、例えそれがまだ充分に活用されていないとしても、今後それが一層発展し、拡大されて行くという事の妨げになるものであるとは考えたくないのです。

今後の世盲協および I F B の協力というものを一層発展するために、我々は大きな責任を持っていることを充分に感じ、更により緊密な相互関係を継続させるため、

積極的な提案を作る必要のある事を考え、次の世盲協および I F B の総会に提出するため両団体の役員会としては、アルガニム氏、アーナー氏、ボルター氏、パークー氏、ソンターク氏の各氏による研究グループを設置し、この問題についての提案を作成するよう依頼しました。これらの方々が多忙な時間を割いて、この重要な問題に充分な検討を行ない、そのための草案を準備して下さった事に対し、私は心から感謝申し上げたいと思います。この草案は、西ドイツのバドベルレブルグにおいて1979年2月28日合同役員会が開かれた際に承認されました。

この研究グループによって作られた勧告というものは、役員会において今後の両団体のより緊密な協力体制の基盤となるべきものであり、将来ひとつの調和の取れた団体として統合出来るような機会を開き、つくり出して行くものであると考えられたわけです。また役員会においては、スカンジナビア諸国から出された盲人団体の勧告についても、慎重に考慮しました。

こうした資料を充分に検討した結果、役員会としては今後の世盲協、I F B の緊密な相互関係の発展と協力促進のための決議草案を作り、今日の会議に提案して皆様方にも審議していただく事になったわけです。私として特に申し上げたいことは、世盲協と I F B の合同役員会は常に相互理解と今後の方向に向かっての深い責任感を持って好ましい状況で開かれ、世界中の盲人、視力障害者が1つになって国際的な社会運動を行なう事が出来るようにしたいという、共通の目的を抱いておりました。その結果、きょう提出されるこの草案が満場一致で承認されました。私はこの草案を審議するため、バドベルレブルグで非常に有益な会合を開くことが出来たことについて、それを主催して下さったドイツの皆様、またDr. ソンタークに対しても、今一度心からの感謝の意を表明したいと思います。

世盲協としての方針というものは、常に盲人団体と盲人援護団体の両方の代表を支持し、またそれを強化し、国内的、国際的レベルにおいて、あらゆる意味での盲人事業というものが円滑に行われるようになると望んでまいりました。こうした考え方には、世盲協のメンバー各国の大多数によっても認められ、それぞれの国の状況に応じた形において実行されつつあります。

世盲協が今日まで歩んできた経験を通して、我々は真に盲人福祉というものを達成するためには、盲人団体と盲人援護団体とがあらゆる意味で一致協力しなければ実現出来ないと考えております。この草案の中に述べられているように、盲人団体の設立という事も特に今後考慮されねばならないと確信する次第です。

ある意味では盲人福祉という分野はそう広いものではありません。少数の指導者

がいればそれで充分であり、なおかつ我々に利用出来る経済的な資源というものは、極めて限られたものであります。こうした事実を考えるとき、我々は国内的にも国際的にもそれが現実の姿であるという事を心しなければならないと思います。

我々がひとつの目的のために一層その努力を共にし、また友好的な気持で共にたたかわねばならない事については、ここにおられる全ての方々もご議議はないものと思つております。またそうすることによってのみ、我々の目標である世界中の全ての盲人の福祉というものが達成し得るものであると考える次第です。

## (2) 援助資源の活用

西ドイツ、クリストフェル・プリンデンミッショ  
ン  
ウォルフガング・スタイン

「援助資源の活用」という私のペーパーの主題は、現在我々が物資の平等に配分されていない世界に住んでいるという事実に基いたものであります。その結果、我々の世界のある部分においては人々は豊かな物資に囲まれて生活し、一方他の地域においては貧困の中に暮らしているという事であります。

目に見えない線がこの地球の周りに引かれており、富めるものと貧しいものとをこの様に分離しております。我々がこの2つのグループの間にある程度のバランスを保つよう努力しているのもこの線に対してであります。このような試みは、いろいろなレベルにおいて各種異なった方法、動機をもって行われております。

「開発途上国援助計画」と呼ばれる事業をより深く検討しない限り、これら活動は1つの共通した分母によって制御され、支配されているように思われます。つまり、一方では与えるものであり、片方は受ける人々であるということです。こうしたグループ間の相互関係というものは、非常に不平等な役割を各々に押しつけており、多くの場合に心理的な結果なども見受けられております。この場合、全ては同じ結果に至るわけです。

こうした相互関係の不健康な性格というものは、ひとつのグループが命令を下すような態度をとり、他方はそれに対して服従的な立場をとるといった事実に基いて生じてくるものであります。与えられる援助の時期、回数、範囲、性格、等まで決定する与える側のパトロン的態度から、いわゆる慈善という名で呼ばれる汚点も生じるものであり、この汚点こそが、2つのグループの間に真のパートナー・シップを築くことが出来ない原因そのものであるわけです。

私の今回のペーパーの終りの部分で、この事については今一度触れてみたいと考えております。

現在行われている国際的援助計画の道筋というものを、まず最初に調べてみたいと思います。つまりこれらの国際的な援助というものは、大きく分けて3つのレベルで行われております。

1. 政府間の援助計画
2. 団体間の援助計画
3. 個人対個人の援助

まず、一番最後のグループから始めてみたいと思いますが、これは私の考えでは最も人間的であり、最も温かく、また正直な助け合いの形であると思うからです。もちろんこれが常に最上の、また最も効果的な方法ではないかもしれません。しかし少くとも、他の2種類の援助にはない要素を持っていると思われます。つまり、愛情、敬意、犠牲心といったものを含んでおります。

私は、ひとりの未亡人がその少ない年金の中から、インドの1人の医者が医学の勉強を続ける全ての費用を援助していた事を知っています。また、最近ICEVHの援助委員会の努力によって行われたプログラムでは、多くの盲学校の生徒達が、貯金の中からお金を出し合って、アフリカやアジアの貧しい盲児達に、点字器具のセットを贈るために協力したという事も見受けられました。

こうした事に関連して、私は多くの何千という個人のスポンサー達が、本当に私的な立場から教育や職業訓練の面で、多くの貧しい子供達や青年に援助を与えていた事を思い起こします。この場合、スポンサーとそれを受ける側との間には、非常に親しい関係が生まれ、与える側も受ける側も、その援助を終わった後も一生続く友情というものにさえ発達するケースが多いわけです。

お金そのものにはあまり関係はないのですが、非常に良い例を挙げてみたいと思います。

アジアのある盲人の農夫達と何ヶ月間も共に過した1人の青年の話です。彼はつましい村の生活を彼等と共にし、またそこにはいる間その村の人々の為に井戸を掘ってやりました。こうした人々の間には、人種、文化、言葉、宗教も違うにもかかわらず、非常に密接な愛情、友情、敬意というものが培われて来ました。更にこのような場合、与える側の人も、また同時に立場をかえれば受ける側にもなるという事が考えられます。というのは、この青年はこの村の人々と生活を共にすることによって、その中で欠く事の出来ない存在となったと同時に、またこうした人々の伝

統、習慣、そして生きようとするその力というものを、多く学ぶことが出来たからです。こうした経験は、彼自身の視野を広め、遠いところに住む隣人達との友情は彼自身の人生をも豊かなものにしてくれました。

私共は、それぞれの団体的機構がこうした性格の活動というものを含まない場合においても、やはりこうした個人的な立場での積極的な行動というものを、今後とも大いに促進するべきではないかと考えます。

政府を通しての援助は、多くの人々が考えるようすに援助活動の中では最も大きなものであり、また非常に重要なものです。しかし、一方、私が調べたところではある程度の疑いを持たざるを得ませんでした。

1979年、あるヨーロッパの国では、その年間予算の0.7%を開発途上国援助にあてるに致しました。しかし、充分に調べた結果、この金額のうち80%は返済の義務を持つ貸付けであるという事がわかりました。という事は、実際純粋に与えられた金額というものは、4億5千万ドル(米国)であったわけです。更に調査が進むに従って、この国においては9つの民間の大きな団体が同じ目的のために1億8千万ドル(米国)の募金を行なっているという事もわかりました。つまり政府の援助計画の3分の1以上をこの9つの民間団体で募金したわけです。これに他の40以上の小さな団体の集めた募金、更に個人的な援助などいわゆる民間の援助金額というものを加えると、その総額は政府の行なった援助を越えないとしても、ほぼ同額になるという事がわかりました。

私は、民間の事業と政府の事業と、どちらの方がより友好であるという事を今論議しようとは思いません。しかしながら多くの場合、専門家を派遣することによって与える側と受ける側の団体の間に、親しいパートナーシップというものが多くの生まれて来ている事が見受けられます。またこうした場合、基金の運用という事は非常に明白であり、またこうした援助は多くの場合、その後も引き続いて継続的に行われております。

言葉をかえれば、私はいわゆる民間団体の行なっている方法の方が良いのではないかと勧告したい思いが致します。こうした団体の多くの代表は、この会合にも来ておられるとは思いますが、私はこれらの方々が、このタイプの援助の可能性を、本当に充分利用しておられるかどうかという事を考えてみたいのです。

現在私どものまわりには、非常に多くの援助、あるいは資源、あるいは人材というものが利用出来るような状態で蓄積されております。それらを開発する正しい方

法を見い出すのが我々の仕事でありましょう。こう考える事によって、私はこのペーパーの実際的な部分に入って来るわけですが、過去何年かの間、開発途上国援助のためにコンスタントに募金を行なって来た民間の団体の経験というものを基にして、それを論じて行きたいと思います。

援助の活用という事についての基本的な原則、および技術というものは、他の方々にとっても何か参考になり助けになるかもわかりません。

#### 第1部 ニードの確認

多くの場合、これは非常に難しいことであり、この面においては海外での協力者が決定的な役割を果たす場合が多いのです。

その国の問題、何を優先的に取り上げるかという事については彼が最もよく知っているのであり、またその問題にどのようにして取り組むかという事について彼の提案というものも決して聞き逃がしてはならないものであります。

援助計画において、どのような形で行なうかという事を決定するのは与える側の団体ではなく、こうした決定というものは全て短期あるいは長期で、確実な基盤の上に立って働いている海外での協力者、その地元での協力者の意思で行なわれねばなりません。与える団体は、このいくつかの要請の中から選ぶ必要がある場合があります。そしてどれが最も優先的に取り上げられなければならないかという事を確認する必要があります。

また、こうした援助計画において、他の援助グループと協力して行なう事が出来ないかどうか、その援助をどの程度の大きさでどれ位の期間行わねばならないかという事を調べ、決める事も必要であります。決して重複したり二重にこのような活動が行なわれないよう、注意深い調査が必要であります。そして地元の協力者との間に、率直な話し合いというものが行なわれなければなりません。

ひとたび、積極的な決断というものが行なわれれば、次はその事業が完成するまで与える側と受ける側の両者が忠実に信頼し得る態度を持ち続けるという事が、最も必要であります。援助計画において、一度始められたものの完成しなかったという悲劇も数多く見受けられます。これは与える側と受ける側との間に、正確な協定というものが行なわれなかった場合が多いのです。そこで第2部の方へ移らねばなりません。

## 第2部 協力団体間の連絡

このパートナーシップは、その事業の性格、範囲、期間、等について明白にはっきりと決めておかなければなりませんし、出来ることならば書面にして記録する必要があります。こうした協定が両方のグループに権利と義務というものを保証するものであります。その中には次のようなものが含まれている事が必要であります。

与える側の団体に対して、

- a ) 一定の期日に、一定の財源を供与すること。
- b ) 一定の期日に、物資あるいは器具等を供与すること。
- c ) 一定の期間、専門家を派遣すること。
- d ) 事業の発展を充分にみるために、その事業の状況を見に行く権利を有すること。
- e ) その事業について、マスコミ、すなわち新聞・ラジオ・テレビ等を通して報告を行なう権利をもつこと。
- f ) 研究という目的で、この事業の結果というものを評価する権利をもつこと。
- g ) この事業のための従事者を、研究あるいは学習の目的でもって補佐する権利をもつこと。

受けける側の団体に対して、

- a ) 両者間の協定に基いて、この事業の発展について責任をもつこと。
- b ) 自分達自身の地元の資源、あるいは寄付といったものも、協定に基いて充分に活用すること。
- c ) 事業の発展状況について定期的に相手側に報告を行なうこと。
- d ) 与えられた寄金の運用については、それを明白にするため監査を行なった会計報告を行なうこと。
- e ) その事業の経済的な全責任を持つようになる期日というものをあらかじめ決定すること。

## 第3部 ニードの発表

ある団体が、他の世界の地域にいる困った人々の募金を行なおうとする場合には、その目的というものを不明瞭にしてはなりません。例えば、「盲人を助けて下さい。」「貧しい人達に与えましょう。」といったスローガンは、決して寄付者に対して有効なものではありません。どのようなニードがあるかという事を、あらゆる募金の際に明確かつ具体的に示すことが必要で、それを明白に行なう募金活動は、大抵の場合成功するものであります。

ニードを発表させるという事は、単にPRの技術的な問題ではなく、現在では非常に重要な道義的な問題として取り上げられております。貧困や絶望、あるいは災害にあった人々の報告をするにあたって、人権というものを損わずにそれを行なうという事は、非常に困難な事であり、それが出来ればそれは偉大なる芸術であると言えましょう。私は人権というものを完全に破壊しているような恐ろしい写真や、また物語が発表されたのを見た悲しい経験があります。それに、あまりにも無残な人々の姿を示すという事は、往々にして逆効果を生む場合さえもあるのです。つまり、与えようとしている人々に対して、その気持を促進させるどころか、むしろ反発を感じさせてしまうような場合もあります。

同じような事は、非常に事実を大きく報告したり、数なども実際以上に大きなものとして紹介したりした場合にも言えると思います。

私自身の経験からして、次のような募金活動の原則といったものが最上の結果を生むものではないかと考えております。

- a) 対象となる問題の性格、範囲、原因、結果といったものについて、正直なそして簡潔な発表を行なう。
- b) 問題全体をよりよく理解出来るような、重要かつ詳しい情報を提供する。例えば、一般的の通行人でも、それを見せれば協力的な気持を起こしてくれるような具体的問題の提供という事も必要である。
- c) 問題を裏書きするような誰かの証言といったものも非常に有効である。
- d) 受ける側の協力団体が何であるかという事を発表し、また受ける側での責任といったことも発表する。既に今まで成功した例なども引用して説明を行なえば、一層効果的である。
- e) 実際の活動の明白な計画といったものを発表する。これは、必要な専門家の数、内容、金額等も含めて発表する。
- f) アピールは、団体の名前だけではなく、その団体の責任者の氏名、更に募金された寄金を運用する責任を持つ人の名前も発表する。
- g) 寄付者は、事業の発展状況について定期的に情報を受け、与えた寄付金が事業の成功にどのように貢献したかについて、はっきりと報告を受けるという事を保証されねばならない。
- h) どのような小さな金額であっても、1つ1つの寄付金に対して、即刻に領収書を発行すること。

こうした原則を心にとめて行なうならば、私共は単なる寄付者だけでなく、友を

得る事さえ出来るわけです。定期的に寄付を頂ける事により、事業に対しては継続的な援助を与える事も出来、また更に新しい新規の事業を始める事も可能になります。

私共の国では、純粹に援助をしようと思っている多くの寛大な方々がいる事も事実です。しかし、それらの人々の中には、援助を与えるチャンネルというものについて不信感を持っている人々も多いのです。いろんな形で集められた募金が不正に利用されたり、募金者によって着服されたりする様々な情報というものが、彼らを怖れさせ失望させております。このような人々の信頼をかち得るという事も、我々の大きな仕事であります。おそらくそうした人々は、使途のはっきりしない政府援助よりも、我々の団体の活動の方を信頼して下さるでしょう。また信頼を裏切らないよう、我々の側としては努力しなければなりません。

ここで、また最初の論義に戻りたいと思いますが、つまり与えるものと受けるもの、富めるものと貧しいものという問題であります。

現在我々の住む世界情勢というものが、どれだけ今の状態で続くかという事を、はっきりと見通せる人は誰もいないでしょう。過去何年かにわたって、世界経済で非常に大きな変化というものが起こってまいりました。我々は、どれ程それが大きな問題であるかということを、今の時点で判断することも出来ません。現在の与える側の人々というものは、明日は受ける側になるかもしれないのが現状であります。私の同年輩の方々は、いろいろのこうした現象をみて今日に至って来ました。それゆえに私は、今の与える側と受ける側、寄付者と与えられる人という原則というものをまずなくする事を、皆様方にお願いしたいわけです。そしてそのかわりに、分かち合うという気持をもちたいと思います。

我々の世界が今必要としているものは、福祉ではなく人類の団結であります。もし今日、確信を持っている我々がこれを行なわないならば、明日はそうせざるを得ないような状況に陥っている事でしょう。毎年毎年より多くの問題が起り、またそれらの問題は世界中で一層大きくなりつつあります。この解決を、もはや政治家だけの手にゆだねておく事はできません。

この会議に参加している我々全てが、特に身体障害者のために責任を持っている我々1人1人がこのたたかいにより積極的な役割を果たすようにならなければなりません。我々が必要としているのは新しい技術ではなく、新しいものの考え方であり、また新しい信念であります。この信念が、我々の今後の活動を決めるものとなねばなりません。